

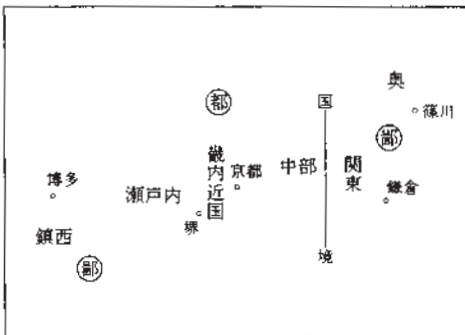
20 将軍と鎌倉公方の対立の狭間で

～葛山氏と大森氏～

1 「国境地帯」の緊張

室町時代、伊豆国は鎌倉府が管轄する関東分国であり、駿河・遠江両国は幕府管轄下にあった。したがって、当時の幕府は駿豆境や駿相境を単なる一地方のローカルな国境としてではなく、幕府と鎌倉府の国境として認識していた〈図1〉。15世紀

〈図1〉幕府の最高顧問だった満済の国境認識



本郷和人「『満済准后日記』と室町幕府」(五味文彦編『日記に中世を読む』吉川弘文館)より

府と鎌倉府の国境として認識していた〈図1〉。15世紀に入ると幕府と鎌倉府の対立は激化し、国境地帯としての駿豆地域は緊張感に包まれていくのである。

県東部の駿東郡(駿河郡)内に本拠地を置いていた主要な武士として大森氏と葛山氏が知られている。「大森系図」「大森葛山系図」等によれば両氏は藤原北家の流れで、道長に敗れた伊周を共通の祖としている。鎌倉時代にはともに御家人・得宗被官(御内人)として史料にその名を残している。その両氏が室町時代には上杉禅秀の乱・永享の乱を契機に、大森氏は関東奉公衆として、

葛山氏は幕府奉公衆として袂を分かつのである。

2 上杉禅秀の乱

1416(応永23)年10月、関東管領上杉氏憲(禅秀)らが鎌倉公方足利持氏邸を夜襲した。上杉禅秀の乱の勃発である。小田原に逃れた持氏は大森氏出身の箱根権現別当証実の案内で駿河大森館(裾野市)に入り、その後、今川氏の瀬名(静岡市)へ逃れた。

この時、禅秀に同心した者のなかには「伊豆には狩野介一類、相州には曾我・中村・土肥・土屋」がいた(『鎌倉大草紙』)。また、『続太平記』は持氏方についての勢力として、二階堂行光をはじめとして「工藤・伊東・加藤・宇佐美・久住・狩野・北条・土肥・葛山・三津・堀越」の名を載せている。この段階では、葛山氏も大森氏同様、持氏側についていたのである。さて、幕府軍の援助を受けた持氏は勢力を回復し、持氏方の葛山・大森・今川などの軍は「足柄の陣を攻落し、相州に打越で曾我・中村を責落した(『鎌倉大草紙』)。禅秀の乱は3か月余りで終結するが、乱後、持氏は禅秀と党を討伐する。逆に、持氏を助けた大森氏は「土肥・土屋が跡を給はり小田原に移った」という(『鎌倉大草紙』)。禅秀の乱を契機に大森氏は西相模に進出するのである。

なお、1422年に、禅秀子息の憲顕・教朝らが京都から関東に下り、軍事行動を行っている。この際、彼らは「駿州沼津或ハ伊豆ノ三島ニ下り、放火乱妨シ」ている(『喜連川判鑑』)。実は、彼らは父禅秀が自害した後、4代将軍義持の保護下にあったのである。関東にいて反持氏の立場をとる諸氏は幕府と接近しており、彼らは禅秀と党に加わっていた。将軍義持は最終的には禅秀追討を決定するが、乱の当初は、義持は禅秀らと、持氏は義嗣(義持の異母弟)と連携しようとした可能性もあるようである。

3 沢田郷・佐野郷をめぐる対立

1428（正長元）年に義持が死去し、その跡を義教が継ぐと、かねてより將軍職を望んでいた持氏は幕府への反発を強めた。このような状況の中、同年10月に幕府は沢田郷（沼津市）・佐野郷（裾野市）を武田信重に与えた。当時「黒衣の宰相」とよばれ、幕府の最高顧問であった醍醐寺三宝院満済の『満済准后日記』（10月23日条）には「甲斐武田刑部大輔入道、駿河国に両所下さる。佐野郷・沢田郷なり。佐野郷は大森当知行すと云々とある。信重の父で甲斐守護であった武田信満は、上杉禅秀の乱の際に禅秀方につき、敗北して自害している。その結果、信重自身も高野山に出奔した。今回の措置は、この信重を甲斐に帰国させるためのものであり、新將軍義教が鎌倉公方足利持氏を牽制するためのものだと考えられている。そして、同月には駿河守護今川範政も帰国させられている。

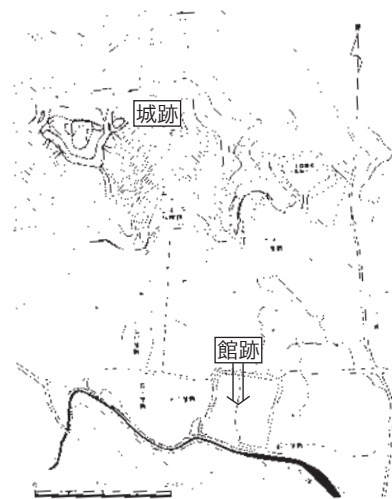
実は、沢田郷は伊豆国の円成寺（伊豆の国市）領であり、佐野郷は鎌倉円覚寺領であった。つまり、両郷とも鎌倉府管轄下の寺院が支配していた土地であった。幕府は両郷を足掛かりにして、国境地帯における鎌倉府色の強い土地を掌握しようとしたのである。ところが、武田信重は佐野郷の拝領を辞退してきた。その結果、佐野郷は「本領」を主張した葛山氏に安堵される。当時、佐野郷は鎌倉公方側の大森氏が当知行していた所領であった。しかし、幕府が葛山氏に佐野郷を安堵したのは、国境地帯に親幕府勢力を育成するねらいがあったからであろう。以後、葛山氏は幕府との関係を強めていく。例えば、1433（永享5）年4月には守護今川家の家督問題で駿河国内が混乱していることを幕府に報告している。また、翌年10月には鎌倉公方足利持氏の動向を守護今川氏を通じて幕府に伝えるなど、各種の情報を幕府に知らせている。そして、室町幕府奉公衆として將軍と直接的な関係を結ぶまでになっていくのである。

〈図2〉葛山城の地図

4 戦国期の葛山氏と大森氏

戦国時代、葛山氏は今川・北条・武田の緩衝地帯の国人領主として独自の発展を遂げた。1496（明応5）年12月21日、葛山氏は新將軍足利義澄の代始めを欠礼したため、幕府から叱責されている。これは葛山氏が幕府奉公衆から脱皮して、戦国期国人領主へと変貌しつつあることを示す事件であろう。なお、裾野市葛山には葛山氏の館跡と城跡が保存されている（図2）。中世武士の平時居住した館跡と戦時に備えての詰めの城が揃って残っている貴重な史跡である。

一方、関東奉公衆の大森氏は永享の乱（1438～39）に敗れるものの、他の持氏方諸氏と同様に勢力を失ったわけではなかった。関東では結城合戦（1440～41）の後、鎌倉公方足利成氏（持氏の遺児）と関東管領上杉憲忠によって鎌倉府体制が一時復活する。だが、成氏の憲忠謀殺を契機に享徳の乱（1454～83）に突入し、関東は戦国時代に入っていく。そして、この間に大森氏は小田原城を拠点として西相模の領域支配を展開していくのである。



静岡県教育委員会『静岡の中世城館跡』112頁より作成

〈参考文献〉

『沼津市史』通史編 原始・古代・中世 第3編第2章第1節

『裾野市史』第八巻 通史編Ⅰ 第2編第2章第2～4節